

東雲小校舎3階フロア地図

# ピクトサイン

国内で外国の人を見かける機会が昔に比べて多くなった。どの国のどんな人たちにとっても利用しやすい環境とは、一体どんなものなのだろうか。様々な人が一緒に生活している社会では、少数派も多数派も、みんな同じように気持ちよく生活する権利がある。自分たちだけでなく、どんな人にとっても「使いやすい」「わかりやすい」ということ、それが「ユニバーサルデザイン」である。

これを自分たちの手で作ることはできるだろうか。みんなで協力してアイデアを出し合ってみよう。自分たちの家族や地域の人たちなど、おとなにも話を聞いてみよう……

ここでは、国境を越えた他者理解の精神—自分と立場が違って、その人のことを思いやることのできる豊かな心—の基礎を育むヒントがある。

## 外国の人って漢字読むの難しいんじゃない？

「ピクトサイン」とは、何らかの情報や注意を示すために表示される視覚記号（マーク）のことである。主に鉄道駅や空港などの公共空間で使用され、文字による表現の代わりに視覚的な図で表現することで、言語の違いによる制約を受けずに情報の伝達を行うことができる。ここにはユニバーサルデザインの理念が息づいている。

江東区立東雲小学校は、東京都の臨海部に学区域をもつ。学区域内にある東京国際交流館からは外国籍の子どもが多数通学しており、江東区内唯一の日本語学級が設置されている。この事例はこうしたバックグラウンドに加え、とある子どもの発言がその発端となった。「学校に来た〇〇ちゃんのお母さんが、学校の中で迷っていたよ!」「外国の人って、漢字読むの難しいんじゃない?」



ESD対応教科・領域  
小学3年

## 自分だけじゃない 他の人の生活も考えてみよう



児童に例示したオートスロープ

## 地域との連携が子どもの興味・関心を引き出した

授業の実際は、まずユニバーサルデザインについて、3年生の子どもたちにどのようなものかを理解させるため、例を示しながらじっくり考えさせた。「学区の店舗にはオートスロープ（傾斜して動く歩道）が設置されている」、なぜ段差のあるエスカレーターではいけないのか。どのような人がそれを必要としているのか。世の中には、身長の高い人・低い人、男の人・女の人、子ども・おとな・お年寄り、自国の他国の人、身体が健常人・そうでない人など、「さまざまな人」がいる。

このような「さまざまな人」が利用しやすくするにはどうしたらよいか。子どもたちは、ユニバーサルデザインの必要性とともに、その基準について考えた。その中で、彼らは徐々に「多様性」というものへと目を向けるようになっていった。「必要なものは手が届きやすいよう、低いところへ」「色々な国の言葉で説明してあげよう」自分だけではなく、他者の生活に思いを馳せるその姿勢には、他者理解へとつながる主体変容の第一歩が見られた。

子どもたちがユニバーサルデザインに対して考える際、教師は「七つの基本」というものを示した。これは、建築家や工業デザイナー、技術者、環境デザイン研究者などからなる研究グループがまとめたもので、「みんなが同じように使うことができる」「色々な使い方ができる」「使い方が簡単で分かりやすい」「使うのに必要なことがすぐに分かる」「使い方を間違えても危なくない」「少ない力で楽に使える」「使いやすい大きさや広さ」の7項目である。

これらのポイントを押さえながら、子どもたちは地域にある施設の中からユニバーサルデザインが利用されていそうな所を予想してリストアップし、調査活動に乗りだした。教師は子どもたちに小グループを編成させ、ある時は各施設のウェブサイトを閲覧し、またある時は電子メールを送って質問し、さらには他学年の子どもの学習活動と連携するなど、その調査活

動は多岐にわたった。加えてパナソニックセンターの方による講義を受けることもできた。ビッグサイトでは、子どもたちに向かって質問が投げかけられた。「学校ではどんなユニバーサルデザインの工夫をしていますか?」

実際にユニバーサルデザインを間近で目にした経験と、思いもよらぬ質問は、子どもたちにとって大きな刺激となった。それは、深く学んでいく上での興味・関心の喚起につながったようである。

### それゆけ! ユニバーサル デザイン隊!

子どもたちはこの質問を受け、学校の施設をユニバーサルデザインという観点から考えた。学校における施設設備の改良・改善策のポイントは、「どこに何があるのか」「どうやって進めば目的の場所にたどり着けるのか」を誰の目にも分かりやすく示すことになった。大規模な改修に目が向きがちだが、子どもたちには費用対効果、実現性についても考えさせた。そして分担してピクトサインを作成した。

「図書室というのは本のマークを表示すれば分かるのではないか?」ピクトサインのデザインを進めると同時に、子どもたちは各フロアの地図を色によって区分した。これはビッグサイト見学の学びから直接取り入れたもので、例えば3階を緑色と決めると同時に、ピクトサインも緑色をベースにデザインにする。これによって、「緑色のフロアにいてください」「グリーンフロアの〇〇にいてください」といった形で情報を伝えることができる。これは、初めて

来校した人だけでなく、通いなれた自分たちにとっても分かりやすいデザインである。

パナソニックセンターの見学を行った際、子どもたちは、世の中には視覚(色覚)障害の人も多数いるということを知りてきている。その時に得た知見はのちに「学校のフロアの色には緑色と水色を入れたけど、これだと明るさが同じくらいだから、違いが分からない人がいるかもしれない」



目かくしをしてユニバーサルデザインの必要性を実感する

「ちょっと好きではないけど紫色に変えよう」といった工夫にもつながっていった。子どもの視野の広がりと、他者への配慮が、具体的な活動となって表れたのである。

### 自分たちのデザイン したものが 世の中のためになる

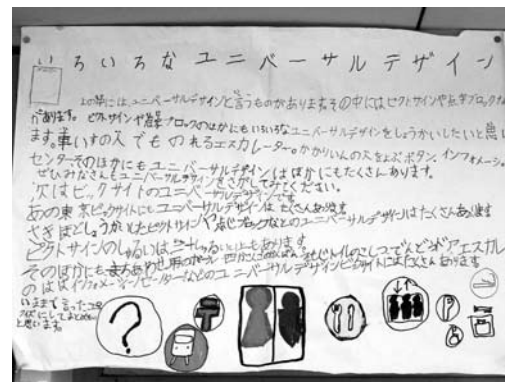
その後、子どもたちは、自分たちが考案した校内用のピクトサインを含むユニバーサルデザインについてのプレゼンテーションを行った。自分たちのデザインを作る過程では、実際に試作品を作成してみるよう教師から伝えられた。また発表に関しても、話し手は「プランのポイント」を明確にすること、聞き手は積極的に質問や意見、アドバイスをすると

したことについて、教師が指導を加えた。

最後に、子どもたちは、自分たちがデザインしたピクトサインなどの校内の表示が、さまざまな人にとって本当に分かりやすいものかどうかを確かめた。活動は、家族へのインタビュー、国際交流館やパナソニックセンターのユニバーサルデザイン担当の方への評価の依頼などへ広がりを見せた。発表の際、子

どもたちは、なぜユニバーサルデザインを考えてみるようになったのか、ビッグサイトに見学に行き宿題を出されたことなどを交え、学習の経過を説明した。これまでの活動を振り返り、それぞれに意味づけをすることで、自分たちの学習が段階を踏んで進んできたことを認識するよい機会となったようだ。

パナソニックセンターの方から好評を頂いたことで、今後の学習に向け、子どもたちのモチベーションはさらに高まった。「自分たちのデザインしたものが、世の中のためになる」これは子どもたちにとって、大きな自己肯定感につながったのではなからうか。



学区の東京ビッグサイト見学で発見したピクトサイン



児童が工夫し、校内に掲示したピクトサイン

## この単元はなぜ設定されたのか—ESDの観点から

### 国際理解教育の基礎

国際理解とは、ここでは「国境を越えた他者理解」と読み替えることができる。ESDがテーマとして掲げる問題の中には、異文化衝突や人権侵害など、自分とは異なるものに対する不寛容に端を発するものも少なくない。これらは、和みや安らぎのある社会生活の持続可能性を阻む問題である。この単元ではユニバーサルデザインの観点から、校内の施設設備という子どもたちにとっても身近な環境を題材に考察させている。国際理解教育というと、何となくスケールの大きなカリキュラムを連想しやすいが、ここではその基礎を育むということで、発達段階に合わせた無理のない導入を心がけている。そういった意味では外部との連携についても地域に根ざした点は大切なポイントと言える。多様性を認め、他者を思いやる気持ちを持つことは、国際理解の根底に当たるものとして、非常に重要な姿勢となる。

### コミュニケーション能力の育成

この単元では、自分たちの校内表示のピクトサインのデザインを作り上げていく過程で、子ども同士や専門家の方との意見交換を活発に行っている。ESDでは、「関心の喚起→理解の深化→参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「学習者の具体的な行動」を促すという一連の流れが重要となる。単元自体を単発的なものとしてではなく、今後も続いていくカリキュラムの流れの中に位置づけるのであれば、コミュニケーション能力を養う機会は早期のうちに充実させたい。しかし、好き勝手に喋らせておけばそれで良いということではない。要点を明確化する、意見やアドバイスをしながら建設的な代替案を考えさせるなど、子どもたちの発達段階を考えたつちも適宜指導を入れる必要はある。

外部の方とのやり取りの中で、好評を頂いたことが子どもたちの自己肯定感につながった場面がある。これはコミュニケーションによって得られた成果である。同時に「他者を認め、自分をも認めること」ができた点については、上述の国際理解の基礎にも通ずるものがある。

## 「ピクトサイン」単元プラン(小学3年)

### 単元目標

1. 「ユニバーサルデザイン」とはどのようなことかを理解しよう。
2. 地域の施設や学校の教師などへの取材活動から、自分の課題を解決しよう。
3. 方法を工夫して、自分の思いを人に伝えよう。
4. 訪ねて来る人の思いやユニバーサルデザインについて考えることを基にして、校

内の表示をピクトサインにデザインしよう。

5. 様々な人のためにデザインすることを通して、他者理解の大切さを知ろう。

### 評価規準

**体験目標** 評価方法：言動・行動観察・カード等

- ① 目的を持って見たり、聞いたりする活動ができる。

**知識目標** 評価方法：言動・行動観察・カード等

- ② 「ユニバーサルデザイン」の基本的な考えを理解できる。

**技能目標** 言動・行動観察等

- ③ 「ユニバーサルデザイン」の考え方で、校内表示のデザインができる。
- ④ 知りたい内容を調べることができる。

**態度目標** 評価方法：言動・行動観察・カード等

- ⑤ 自分のデザインをより良いものにしてしている。
- ⑥ 自分以外の他者の気持ちになって考えようとしている。

### 単元の活動計画(全25時間)

| 次 | 主な学習活動   | 時 | 評価規準  |
|---|--|---|-------|
| 1 | 「ユニバーサルデザイン」って、なんだろう？<br>・子どもたちが近くのショッピングセンターで見つけた施設面の工夫「オートスロープ」について発表を聞き、理由を考える<br>・世界の中にどのような人がいるか考える<br>・ユニバーサルデザインの必要性を考える<br>・ユニバーサルデザインの基本を理解する<br>・ユニバーサルデザインの観点から見て、オートスロープ以外に気づいた工夫について考える<br>・実際の使用例を見る | 2 | ② ⑥   |
| 2 | 地域にある施設の工夫を調べよう。<br>・地域にある施設でユニバーサルデザインが利用されているような所を予想して、リストアップし、調査方法を考える<br>・調査活動を行う<br>・分かったことの報告会を行う<br>・地域の施設を実際に見学し、工夫を知る   | 4 | ① ④ ⑥ |
| 3 | 私たちの学校は「ユニバーサルデザイン」？<br>・学校の施設をユニバーサルデザインという観点で考えてみる<br>・校内の施設のピクトサインをデザインする<br>・実際の活用場を見学し、改良を加える   | 9 | ③ ⑤ ⑥ |
| 4 | 発表しよう「ユニバーサルデザイン」<br>・発表の準備をする<br>・プレゼンテーションをする<br>・優秀作品を選ぶ  | 6 | ③ ⑥   |
| 5 | 代表作品を改良し、発表の準備をする。<br>・クラス代表案を他のクラスで発表し、意見を聞く<br>・学年の意見を参考に改良を行い、発表の準備をする<br>・学習の軌跡の製作を行う  | 3 | ⑤ ⑥   |
| 6 | どうかな？このデザイン！<br>・学習の軌跡を整理する<br>・自分たちのデザインした校内の表示や改良が、他の国の人や色々な人に分かりやすいものかどうか確かめる   | 1 | ③ ⑥   |

※東雲小学校では、教材や活動どうしの関連性をとらえるために、各学年ごとに「ESDカレンダー」を作っている。  
東雲小学校ホームページ <http://www.koto.ed.jp/shinonome-sho/>